



繪本更科州帑後編

卷之二

18
遠へ
277
7



門遠 13
瑞 977
卷 7

本

勇婦 繪本更科草紙後編卷之二

遠州小夜中山麓 栗杖亭鬼卯著

鹿之助加賀國酒家 菊小逢ふ話

酒助 永膳 三

放下一頭却 説先年笛吹峠 更科小助らき 菊酒屋

のぶき 手下の者小贈 古郷へ帰る 幸助が

亂とや 月満る 玉の如き男子と産る 両親も憎し

思ひ 初孫の白髪見 心の角も折る 次第しく愛し

く年を経る 小きく 幸助ハ似ど 至る 性直く 祖父母

お菊も 孝行 大い 十四才 元服 名

と幸藏と 呼ぶ 家事を任せて 改め 暮

更科が 蔭 人間 朝暮 甲州の方と 伏拜 暮

勇婦全傳卷之二

近頃京都三条通に出店と出... 殊の外繁昌し
 て次第に福有ふらぬきハ幸藏小家事とまうをい
 の出店へ来ア金銀の取メアんと加賀より上京し
 成て暮し多る此時山中庶之助八月とかけの日と経て
 漸京都小着多るが足利家小仕官やアんと方ハ風聞と南
 合し將軍義昭公昏君めく三好松永ハ威と奪ハま
 足利の衰微日くれば西国を行く能主と求めんうもど
 都小足とととと都珍らしき名所旧跡とも尋んと
 旅泊小宿アしうととと爰とうれお行々或日三条通と
 通アし小美しき酒店のりうまきバ立よりて一盃と傾ん
 ととつと休旨酒嘉穀のりバ出ととと取ととと獨酌小旅

憂とつとれつとつとつと所へ若侍四五人どやくと入来ア早く酒と
 出で高声ハ罵り時曲高くと流ば連不瀬のふるまふを
 ちとつと大つとつとつと鹿之助ハうふ悪漢等いふつとつとつと
 出ると片隅ハ小蹲成て居りつとつと此者ども大ハ爛酔し
 ていざつと是より端の寮へ行つと吞直ると立出るとれと店
 守の男恐るく只今の酒價とハ拂い下るとれとつとつとれハ
 一人声高し身が屋鋪へ取ふ恭とととと言捨ゆくと引とめ
 屋鋪ハ何方ハ名ハ何とつとと言せも立バ憎き下郎ハ身
 松永彈正ガ家来なり小ざうし外立洛中とて我等ハ
 酒代と取んとハ慮外千万と今日より商内のかつとつと
 小踏潰せと五人の悪漢鈍子盃らつとハ鉢皿までも手毎



山中鹿之助
 松永が家来の
 狼藉を憤つて
 是と
 誤らむ



山中鹿之助

お投付踏破けバこそ狼藉とて手代下男立てんげしげと憎き下
 郎ども家ホホ手向いと居ると寄つるものもと投付打擲す
 らるる鹿之助もゆきれりゆりゆりか寔不足利の代もと
 成りかゝり狼藉と取静る人もろれり余りゆり法外
 たりいづや取扱んとあけくと五人ふしむ只今の時宜當家
 の下男も不屈もゆり足下達酒杯香り價と出れば帰
 らぬ故留りゆり其の立腹酒器ゆり打破きあふり無法く
 某も田舎者あふり京都の案内ハ存存ども價と取どり
 酒と沽りハ何とりゆり家内と眷らん酩酊と見れば酒器の
 損トハ格別ゆり酒肴の價と拂ひゆり帰られとせし
 やふ言多き一人の侍大お怒り汝此小冠者何と巴り知アはじ

挨拶とゆりせりゆりゆり巴も傍杖お打のりて異人と取て
 けりバ鹿之助今ハたまりゆり此男と狗子と投りゆり大
 道へ打付ゆり残りの四人侍と投りゆり一分の立べき
 と茅の穂先と抜つゆり切りゆりけりゆりゆり立
 りゆりカとゆき取投付まこと口惜とゆりゆり抜り
 五人一同ゆり声と揃へゆりゆりゆり是も一ゆり取五人と
 かゆりゆり其上ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 眼の玉も飛出る心地ゆり細やゆり息の下ゆりゆり
 ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 汝お一ゆり引括り公へ訴ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 拂ひ此分お帰るや五人伺と揃へ四鉢の割代とも拂ひ

居一の由り下されしつふ一引起し大小と鞘ふ納め渡
 されハ懐中より金子一両取出し是あり了筒したるを
 鹿の迹も見どし歸りたる家内の者も
 大おろろとびねくハ若衆のハ蔭を折ふり着りてハ
 酒代なりハ吞たすも其俵は捨置け向後の見
 せり心地よく存けり先内へ入る今一盃さし下さ
 すと手代も一同み手をつきて述べれば鹿之助答へかけ
 うまわれり余り法外見捨かくさしひり
 礼謝受たに潤す我價とも取ると鵝目し出下何
 貴公校の酒代とささ此一両ハ寔ハ天より授りし
 ものなり夢く佛いふとつ物蔭しり苦も聞

居く慄くわくわく立出扱もくお若衆様のハ蔭下し
 首尾能収アハ先く内へ入りて此家ハ一宿し
 田舎入りハ登りあつてハ休息し
 つく鹿之助が鳥辺詠り平尔あがハ元禄ハ甲州の
 此産物ハハ名ハ更科さゆとハ鹿之助大驚
 尋りて更科とつてハ仰天し
 目のくり母ハ生写しるハやと尋まつてハ
 此縁よりハ目あかしの有るハ
 りめ更科さゆハ助らる國元へ送らる参り加賀ハ
 菊とハ女あつてハ此上ハハ此家ハ苗サハカ

五条坂へ掛り車やどり馬とめそそふる花と
 見巡る折る向ふより絶世の美人を来りて年と
 十六夜をうりて見え芳容窈窕くくも光る斗
 白紙下着小緋襦子色くの糸とめて環と縫し中着
 と召身の上濃き紫霞小帰丁と漆付ハハで此花と
 見捨べき従婢数多引つき三年阪と櫻鬘し下り
 風情月宮の端嫁花おくれ来りてこも勇猛絶
 倫の鹿之助惣身癩癩瘰癧し惚惚し前後とこれ
 思いと其人のさくみ付く下りて禁入乗物待受へさ
 此召ともしれば持るひ櫻の枝枝がやゆりて人一枝
 手折る道小捨むい花諸も乗物入らせ玉ハ従婢

前後と守護し何国も急ぎ鹿之助ハ忙然と
 酔るがごとく折捨るひし下枝と
 取上是も其人の手ふみさりと思へ捨もやび只つ
 く夢の心地し花と詠る心も帰るもさくり
 く菊酒屋小降りくれハ菊立出若旦那ハ一
 早くぬえりやうりて一枝出持ハ花のよるハ出
 づりて覺えぬをど帰りの早きハ心持めくも悲
 くハさるやとさく尋ねまもあつくのいさく我
 伏所入るもハ菊ハ心を痛め定而流行の風都也
 引あひしと某と某と某と某と某と某と某と某と
 とのし物ともさくと言ふ思ひゆりを見えられハ



神女巫女全集卷之二
 神女巫女とて集りいろく祈禱まどをたれども次第に顔色衰へく見えたるが家内の者大に心をつらけける鹿之助ハ我ながら天下に英名をたると思ふ者の只一人の婦女に迷ひかく森食とも忘るる我ながら浅面し心やふ恐るるも恐るるも是欲なりと思ひ忘まんともうふらやうく其傍立ちいさらかきし櫻はらひいろちかきほど捨もちり其花をたれし依あつり肌を離るるせめてりも思ひたんとし紙お身おまひうちやれくわと身にお香えうぬ花の佛かく泳ど志もやび今ハ命もあやうき程おううぬもは菊ハ共やうと代伺い此疾ハ全く若れ此方のううれと意るる人假令いり成人なりとも金銀ともく叶へ春も人ハ我恩

報どなりと鹿之助が寐所お来り人と佛しう言々君のはいりき全く意とらうとと覚えはれ若き此方のううぬは包まば明し遊しはいつううぬかあもあまわは媒しと達を春を人と真實とゆへに速もれども鹿之助と十七才のいすごかアアのたつとまふあたれは恥かしく只いりたる九様のううぬき心の悟もなるとの答へはれお菊ハ大に恨と何ううかかへ色もあしと梅の押花のたふ紙お意しううハ察し春もせつとて君の母上ふ命を助られしううううの隠しはういりかかりの恨ぞやと式ハいうり或は歎きまうくと言われば鹿之助も糸薄穂お出さうかく真實ふ宣ふくハ隠しううあはれいりや地主の花見ふまう時

かゝる人と見初志と人ととるふ 倅ふまをいひうんともとるふ
 其折捨むい一櫻と今も耽身と離るる口惜や狐狸の我ふ
 世孤妨ぐる悪魔りや慎んと思へ猶更志がす一人の為
 ふ死んハせてももの思ひ出とめさるる国と出る時いこ
 身ふがの一人の婦人の為命と捨るるの浅間かかも歎りらる
 口昔もりの金に洞えりてと涙のこころも落しえん
 お菊ハつと女心のやめさくゆと泣出なみだー心弱くも
 叶りてりどぞうに心弱く思とぞやれと雲の上人の姫君ふ
 こもりも虎く見く石ふ立矢もふる是ハ意の叶りぬりやめ

ぞれ其姫のりり所も余所まぐり尋みしめとらりて帰
 了代急あふと見えろ乗物飛がくみ帰れ其所を不
 知ろ何ぞ目印と一ろわいも陸尺の看板の伎中
 字を添付とりと覚ゆるうりお菊悦び夫をよ泥手ぐりなり
 公家の中も中とり六字の伎付一陸尺ハ中御門中納言宗教
 卿たり滅や此卿の姫君ハ天下無類の美人とて女御后も
 備へんと父の卿ハ思されど只佛の道ふ心とよせたりは心
 のまはきねよりの聞たり正しく此姫みずおかしく人とし
 ふも鹿之助も心付滅小菊川の里も宗行卿の灵我ふ有
 縁の者と仰りてハ此もや此意未頼り初て伏全と
 たりとれお菊ハ志づく沈吟ー手とら幸のふみ

鳥妓多作集

つれ加賀國わのり時手習の友とて一縣名の娘今中
御門家の中老と成り名は柵と申折ふ一我方へも来る人
わづら氣づういひら此人と頼とて媒とて一此意叶へ参らせん
心妻く思召とつづど鹿之助ハ夢の覚ゆる心地一其日
次第ハ快方ハ趣きけり

柵鹿之助ハ九重姫ハ傳ふ結

かくてお菊ハ柵方へ怒怒りつづつれハ何ゆゆ命と柵ハ暇
をもく酒屋へ来りてお菊ハよほいさめくと變立ぬ鹿
之助と引合せつづの人と拂い此方ハわづらハが恩人めて由
緒つれハ方めつづかりのふみあつ其館の姫君と見始む
いハ命もあつと程と悪幕いあふ余りおはつづつとハ幸

とりて夕々昔のよとつれは此の御とて頼と参らせんと迎
へしつれ人一人ハ助と思召此意媒とてつづつと程と
見え
善根おれり人とさめく頼と参らせバ柵も沉吟しつづつと
うれはと此姫君ハ滅ふ都廣とてつづつと続くと粧のあふ
うれを月とて心の御も入内させ后も備へつづつと思召せも
兎角たつと事とてつづつと佛の道とのと尊とてつづつと母君
さめくと諫めつづつと今ハ詮方とつづつと粧いと尼法師とな
さん無下ふ本意とつづつとつづつと姫が心とつづつと嫁さんとつづつと
つづつと何方とつづつとつづつと折節ハわづらハ宣ふと大納
言殿中將及或ハ親王家より送るも玉章ハ雨の降とつづつと
つづつと手ふとつづつとつづつと打捨つづつとつづつとつづつと中とつづつと此意ハ

取持いづがじ是ハ思ひ切あへりとりふも鹿之助ハ猶更お菊も
 今更忙も果る力を落しそが鹿之助自赤やふなりて言ふハ
 此詞の趣めうハたて佛在世の富慮那尊者の末子といへも
 及ふなきもいづば我も所詮及ばぬ恋とみきうの侍しんうれし
 我心のつげとみふ惚てあへく姫の見あへるこそうともみ手
 取らせむが生涯の本望なり何れぞ取次下るまじとやと涙
 ととね述さればお菊も俱く若き此方のかくまもあての
 思ひふてごもい何れぞみみと姫君ハ傳へむりきとむりき
 頼みされば柵も詮方なくとくハ先みハ惚あへ折と見合姫君ハ
 見せやさん去なごうかきうびく此恋計ふ金一と夢く思召
 りしかく言されば鹿之助もあへて返さる手おふれりてみ

あを我みまごう捨もはれどとりふ古赤も竹きバ姫の此手の
 ふきうんハ此世の本望なりとみるるぐと惚柵ハわきけ
 りハ柵も迷惑なごみ受取館へこそハ歸りてぬ扱柵つぐ
 と思ふア封の終ハ姫君へ出さる中く手お取さふとどいな
 せんと思案せしが急度案ト出御櫛引てあへ折うへつも柵
 うけりり梳りさればうのみあま手おぬ不思案るる負りし
 て姫君ハ此及古とみらん遊ばりいけいけより此箱ハらりやと
 ちい出りされば姫君何心なく手お取上見まハ秋の野摺ま
 帝ハ行成様のおつと手あま思ひのさけは書さるめ今ハ命
 も絶りん思ひ心筆ハ頭もぬくに
 らりれふふかけよ消ぬぬく思ひぬるさるのむ此緒

かく詠えいしうくれば姫ひめ少すくしはけしは替からせぬいやは柵さく此こゝみは
 汝なんぢが媒まへしう自みづか派は不ふ義ぎも落おし入いんとしうや向まう後ごかゝりし
 慎しんしべし序つぎなぐし自みづかが心こゝろの程ほどとも言い用もちさん父ちち君きみハ自みづかと高たか位ゐ
 のう人も嫁よめせんと思おも召よ心こゝろ母はは君きみ渚しづとも勸すすめ久ひさと好この君きみを縁ゆかり
 たりてや西さい国こく尼に子し式しき部ぶ少すく輔ほ義ぎ之の室むろと成なり多おほひて鄙ひな小こ下くだり
 る人ひと自みづか妹いへとして宮みや方かた親おや王わう方かたひく嫁よめしなば好この君きみの上うへに立たん
 不ふ義ぎさりりしとよりたゞさる心こゝろなけしハ私わがハ慢まんやうも恋こゝろとる
 る穢けがハく思おもふさり女をんなハ兩りゆう夫ふふま見えぬ五ご障しやう三さん後ごの淺あ間ま
 しに身みともて夫おとこのしりしを撰えらばんや此人このひと何なに国こくの人ひととハさ
 祢ねもかく懸けん想そうしあハたゞは男おとこさうんかゝ人ひとハ飛と鳥とり川がはの
 淵ふち瀬せと替からん心こゝろ鏡かがみふくけしりしとやより佛ほとけの道みちふ入いぬる

身みるれば後のちの世よを怖おそしれかゝりてく此こゝみえのどくしりて返かへ
 とべしとさうも向まう後ごかやうのめと取と次つぎなごらるる自みづかが傍そばおを置お
 けといひふ変かりし不ふ良りやう氣きふ見みえぬハ柵さくハ返かへと詞ことばさなく
 誤あや入まり鳥とり赤あかやうふかゝりしとさうも日ひ菊きく酒さけ屋やへ来き
 り鹿しか之の助すけお菊きくふ逢あはさうさうぐのはしと語かたや所ところ詮せんいっ程ほども
 心こゝろの和ならぐりもゆきまどが思おもい留とどめてもへさうも心こゝろの謀まうと
 りく口くちより奥おくさういふ入いりしとさうも心こゝろの所ところを笑わら度ども
 くさる返かへしあは是こゝろを思おもひ出でてさうもと言いはれば鹿しか之の助すけお
 押お戴さき誠まことは元もとの藩はんうさ姫ひめの心こゝろ目めふりてハ逢あはさうも
 心地こゝろしとこれ此こゝ上の祢ねぐみと今いま一度いちどの姿すがたと見みく此こゝ世よの思おもひと
 いしりし此こゝさういふ出来できたやとさうも涙なみださうさう述たるれば夫おとこハ

いと安さぬゆへに姫親世音と信仰しあひく毎月十八日を清
水寺詣りて折と見合て舞臺の辺りお祈りさへは姿むらり成
ともゆへにうらぶらぶしつづりに活きたる鹿之助大ふり落らび世
ことふ頼と参りてと柵と響を歸りて

鹿之助九重姫の危難と救ふ活

荀子曰君有妬臣則賢人不至誠成哉此時將軍義昭公酒
ふりけり多くの美女と集りてハ倭臣等其虚お乗し武ハ公家
高家の簾中武家の妻と久も貞に女ハ理不尽お奪ひ取て
しつげりて是と諫る賢臣もつげられハ諏訪飛彈守が家
来り津村軍藏とつらあり何事將軍家の直参ハうらんと兼
て心掛りてつらあり婦人と見出しつら上りハ敵の大將の首取

うらふ増らんいづや洛中洛外と巡りて美女と見出しハ感お預
らんと日く人立多き所と伺ひて此時五月十八日山くハ青葉
しや山郭公音信いと面白折らば中納言宗教卿の姫君
名ふり九重の内もつづしく婢女を召つて清水寺へ参
詣らば山中鹿之助ハ今日ぞ姫の正姿とくと見て心の迷
いと晴さんと爰と曠と出立ち只おとくハき美少年の
お菊が財宝つらふらませ衣服大小の結構行ふ人も振ら
はうり之最早姫君の参詣ゆへに時刻うらぶら心開くと
観音の灵前うて来りて早く最早先より参詣すくて願
言終て舞臺お床らうとせ千里鏡取出し淀伏見のゆり
と泳りて其粧い何ふた人ともう鹿之助ハ只夢の心地

大剛の勇士うれども 姫の血貞つづくに見る事さるら
 ど胸うつくしく貞と夕陽の紅葉しきり側らうく立ちれば薫物
 の匂いとあざとく免せん角せんと思ふうらもしく 姫君と貞と
 見合せたる 姫君もたつと心うをわく様どもうふく少
 年やくはくぐと見えへば柵ハ耳もふより何角耳なき
 急よぬ気色変らせむいち早く乗物ふりさき林のうへ
 いそだる鹿之助もつ成りつとハきく様どもは跡ふさふ見え
 隠るふ五條の橋の辺りまき来せたる橋の入りは一様の頬
 うみり侍十人じり侍受しと見えり夫と声かききばら
 くと立寄 姫の乗物を引とく引出さんとさるふど 青侍ども
 大小驚きこハ 伺者たれば狼藉のふもいゆるとゆくと立ちまは

此者ども 嘲笑い乘等ハ將軍の仰と受此所不待りけり
 姫と渡せば其通いいと 言ハ賀茂川の水難水振廻人と
 先お立ち青侍と橋よりぞんぶと投落せば此勢いお恐れ
 人轆尺青侍ハ跡とも見どしと 逃失り是 誰人か
 津村軍藏宗教卿の姫君美人の聞えりり故奪取
 將軍へき上人と 計りし柵ハ甲斐ぐり長刀の鞘は
 づり乗物の前お立ちさうり寄らハ切らんと身かぬさうり
 軍藏も此女さきものこと刀拔とら渡り合ふり戦ふさうり
 残りの悪漢乗物より 姫と引出し肩より引け河原を下
 け行ハ柵ハ是と見くこハ口惜と軍藏と打捨馳行人
 津村も去者あき 喰苗く動うさのバ心むりハら



津村軍蔵がユキ
よつゝ九重姫危難
鹿之助とれと救ふ

貞女全傳卷之二

貞女全傳卷之二

ていし追行ゆも叶ふとも其内ト何国もゆく連行ゆ鹿
 之助ハ此時まがう跡ふ成も慕い来アタラシくつけたる
 男の姫と引立行と見より何うハものも猶豫なき章
 黙天の如く追うけゆく程ハ六條河原へ連行情なく高幸
 小手ふいせり泣叫びあつて面倒なりと手拭りも口は
 いすゝ免まきり鳥お引づり行と鹿之助ハ火雷神の荒る
 勢いあま先引立行大男と川へざんぶと打込バ何やうか
 狼藉と残りの七八人抜連、切かろふハまじやと
 俣ふ矢場ハ五六人切倒セバ残りの者どもまじろふ成り逃
 行折々津村軍藏柵と切伏せ姫の跡と追々来々これ
 鹿之助と見え大に怒ア巴小冠者何ものうらハ邪広とび

此世の暇も人ト三尺五寸の大太刀抜り討くかハ鹿之
 助完ふとこゝろいやく敵の詞もそと引くと二打三打
 打と見え一が軍藏、二ツふ成り倒り九重姫ハ夢
 の心地しうらけくもいすゝ免まきりておのろは縄引ぬ
 手拭ととり心安くかハ一ツに館へ供与んと芥川ふ受
 わらねども姫と脊お肩まひて五條まぐ立歸まはけ
 成り伏しハ柵うりこハはやと姫君ハおぼいなり介抱
 ちハ柵性根付りうらや姫君めくまきり初太
 カと受損ト眼うらてあまうら歌ハ何国も失
 ぬ跡慕人ととらは一足も引まば此所も死人口惜
 思ふら姫のし声耳ふ入心たう成り供与ハ何人あや

と眼を定めて見くこハ鹿之助候しつたハと云や我ハ深手
かきこハ此所より死ん何とぞ姫君とハ館へ伴ひしむる人
らうやと云ふゆふ鹿之助立寄疵口とくと見て敷箇所
まとも急所ハとづれとり心安く思ひ上姫君ハ我身守護す
上ハらつても氣づういさしハ身是くりの浅疵ハ心と落とる
やらういさむくと引立る折る逃帰ア一鞭尺も漸ハ来で
くれハ鹿之助カと得姫君ハ履まむとてハ供足んその手履ハ
乗物あつて館へ帰るきけし疵口と云ひとて乗物ふきき
姫と履まむとて館へこもハ帰て多敷

鹿之助宗教卿ハ頼まれ播州へ趣く活

かくて宗教卿ハ掌中の玉とりめであしし姫君の危難と聞あし

しり館の騒動大うさうさうハ雑掌小田原掃部之助追取カ
五條通へ馳向へハ向より鹿之助姫君と履まむとて柵を
物ふのやうに來てくれハ大およろこび館へ帰てハ宗教卿夫
婦ハ死し人の再び蘇アし心地しうと云ふむあつて斬る
扱鹿之助ハ向いいうる人くれハ姫が危難を救ひしむと云
ぐ礼謝ししハ鹿之助大勇の若者くれハ自若として其ハ速州
諏訪原の城主とてハかくの次第とて都へ登て去る
頃清水寺あり姫君見初まるとせ始末今一度ハ白と拜
せん朝より清水寺詣り歸この跡と慕ひ五條通中
来りし姫君ハ奪ひとり行と見捨ごとく直うけて助けさる
しと始終色まひ語てくれハ宗教卿其直言と感トたまひ



山中鹿之助不計
 宗教卿より姫と
 貫い夫婦の縁と
 こと



園方

三がく

誠まことおかしくハ大膽おどろの勇夫ゆうぶなりかき尋言じんげんと親子おやこの中なかよく語り
 きくしきくし殊こと不系ふけい國くにも賤せんしめぬ人ひとなりババきくの返へん礼れい不ふ姫ひめととてと春はる
 らりんらりん姫ひめが心こころを如何いかんと宣のたまへババ姫ひめ君きみハ切きのさう傷きずやうやうぬ心こころら
 みみううささ後ごししをを殊こと不ふ男おとこなりなりのいと清きよらうらうふ太た刀た打うの早はや業わざ
 ままくく何なに不ふ足ありり人ひとと思おもひひぬ人ひとハハ良よ小こ行ぎやう業わざししうう声こゑををやうやうに
 いいううややううととははううりり襟えり不ふ良ようう入いぬ人ひとハハ良よ方かたももよようういいぬぬいいら
 成なり賤せんしし者ものなりなりもも姫ひめが心こころ不ふ叶なははババ聲こゑががののふふるる人ひとと思おもひ
 小こ由ゆ緒よ正ただししににししるる男おとことと聲こゑ不ふるるももののれれししとと宣のたまへは
 雜ざ掌しやう掃そう部ぶ之之助すけもも俱ともくく誠まこと小こ姉あね君きみハハ播は州しゅう一いつ國こくの城じやう主しゆ尼に子し式しき
 部ぶ之之輔ほ及およへへ嫁よめししぬぬハハ武ぶ家けハハ縁えんありありぬ家いえとと覺おぼええしし先まく
 内うち祝いわ言げんのの也や盃さかづきささううくくくくくくくくくく鹿か之の助すけ飛とぶぶくくくくハハ雜ざ有ゆう

此詞このことばいつの世よふふのの忘わすれれししるる人ひと抑おさ母ははハハワワククシシ國くにとと出でるる即すなはち
 天下てんかハハ英えい名めい海かいななととどどんんババ再またいい帰かへるるトト誓ちかいいししにに淺あ間まししや
 ここのの頃ころ頃ころ姫ひめ君きみとと見み初はじめめししるるをを志こころももららけけ既すにに冥みやう鬼おにととななるる人ひとと
 日ひにに時とき成なり哉や今いま日ひのの驗しるし動うごゆゆぬぬゆゆくくもも我われ聲こゑ不ふ負おまますすののをを
 内うち館たねままうう来きアア上うへハハ我われ願ねが既すにに満み足たりりり殊こと不ふたたららぬぬのの由よし免ゆるめ
 何なにくく婦つま妻づま不ふ下くだりりぬぬ人ひとととハハ残のこるる所ところななれれ仕つか合ありり是こゝれれ忽たちち
 迷まよひひのの雲くも晴はりり元もとのの志こころにに立た帰かへりり天下てんかハハ名なをを揚あげげ人ひと寔まこと也や志こころ賀が
 寺てらにに上うへ人ひとハハ也やとと所ところのの手てははうう手て不ふ取とりりににややくく玉たまのの緒いとと
 價あららむむのの悟さとアアははゆゆききししとと承うけけもも志こころづづくく姫ひめ君きみとと眷まふふ不ふ履ふみ泰たい
 ららううししううりり色いろ欲ほめめ念ねん満まんりり願ねが心こころののととくく天下てんかハハ名なをを揚あげげ其その
 時ときもも姫ひめ君きみととハハ受うけけ人ひと家いえととななれれ妻つま子ことと忘わすれれぬぬハハ武ぶ夫ふのの常つねと

夏姫全傳卷之二

此殿中に見返りもせぬ出行と乗物の内より柵ハアうく這
 出先程ううのやうとさうした中に聞こつてよろこび小絶さ何
 とぞ今宵ハ宿館少く新枕しあへ行末のううとも此物語は
 つふ姫も今更余波をくくせらる今宵ハさうりあくと袖引
 ろくハ鹿之助心附策前より取まきれ柵の痛手を向ハ我
 軍中ふ用ゆる金瘡の奇方つう二三日のうちにハ平愈せん此
 人ハ我恩人なりと懐中より茶取出し疵口ふぬと柵おひく
 此程の厚志ふうり我願い足さういつて今宵宿館ふ留らん
 縁ゆゑハ重而逢まつてせん又立出ハ中納言を押し先我算
 尼子義久ハ毛利竜造寺の大敵おかこきれ毎度敗軍おせよ
 うり足下姉算のううれハ何とぞ播州へ立越尼子に力とつてせ

民をばとんむる謀張ふくまふとと宣ハハ鹿之助頼言し
 某不才おれは今日の内恩を報むる為義久不随ハ忠勤を励
 むべし内心易く是より播州へ立越尼子と補佐せ
 んとさういふに述々ハ中納言及大ふさるるびあうくと認
 渡しあハ押しおれ懐中へ飛がごとく出行せ

繪本更科草紙後編卷之二終

